バルチュスとリルケ

北 川 正

バルチュスとリルケ

北 川 正

<ポーランドの名門>

バルチュスの本名はバルタザール・クロソウスキー・ド・ローラ伯爵という(正確にはクワソウスキー。古いスラブ語で、クロと発音すると父エリックはカンカンに怒ったという。エリックはポーランド貴族であることが誇りだった『回想録』)。またバルチュスの祖母はイギリス系で、あのバイロン卿と姻戚関係にあったという。

<ロマンティック>

バルチュスはシャトーブリヤンを耽読し、ドラクロワの『日記』を枕頭の書にするロマン派である。「私は喜怒哀楽が激しい、おそらく情的にすぎるのだろう(『回想録』)。」しかし、その分、何があっても動じないイギリス貴族のダンディスムに崇敬の念を抱いている。バルチュスはこの二つのベクトルの中点で釣り合いをとっている。

名もない画家だった頃、バルチュスはアントワネット・ド・ワットヴィルとの叶わぬ恋に身もだえした。「私は次々にラブ・レターを送った。彼女の磁力はとてつもなかった。彼女は惚れ惚れするような〈宿命の女〉だった。私は彼女のすべてに惚れた。彼女の美しさ、彼女の大きな目、彼女の物静かさ、彼女の自信、貴族的な風姿・・・(前掲書)。」アントワネットは4歳の頃からの幼友達だが、スイス・ベルン地方の名門の出で、しかも当時は外交官の婚約者がいたのである。

バルチュスは、自分を『嵐が丘』のヒースクリフに擬してその挿し絵を描いている。絶体絶命の境地で暗く滾りたつ情念に弄ばれながらも、バルチュスは執拗な押しで、ついにアントワネットを

略奪,1937年4月にはめでたく結婚して2児をもうけた(だがアントワネットと添い遂げることはなかった)。

ロマンチックな封建 貴族を自認するバル チュスは、アントワ ネットとの因果めいた 情熱恋愛を「恋と情熱 に」生きたバイロンと の血脈に関係づける。 実際、バルチュスには、 汎ヨーロッパ的なハプ スブルグ家の伝統と血





脈が息づいているのかもしれない。

だが、このポーランド貴族は19世紀後半に帝政ロシアに追い詰められ、バルチュスの祖父の代からフランスに亡命を余儀なくされている。



<家庭環境>

父エリック・クロソウスキーは『ドーミエ論』

(1905) をものして美術史に名を残した美術批評家であり、エレガントな画家でもあった。母バラディーヌもボナールを師匠とする水彩画家だった。この2人を両親に、1908年バルチュスはパリ・モンパルナッスで生を受ける。

お金持ちで、コスモポリットで、ナヴィ派と親しく、若く美しいクロソウスキー夫妻は、パリはボワソナッド通りや郊外のサン=ジェルマン・アン・レイで文芸サロンを開いた。華やかな夫妻の取り巻きには、アンドレ・ジッド、ボナール、マルケ、ストラバンスキー、マチス、ニジンスキー、ドラン、リルケといった当代一流の作家や画家、それにあの税官吏ルッソーを見いだした画商ウィルヘルム・ウーデなどがいた。

バルチュスと『ロベルト,今夜は』の作者となる3つ年上の兄ピエール・クロソウスキーは,このように特殊な教育環境に育った。

バルチュスが4,5歳だった頃,美術批評家の父はセザンヌのリンゴの発見に浮かれていた。とうとう両親が友人たちを引き連れ南仏エックス=アン・プロヴァンスにセザンヌ詣でに出かけることになり,バルチュスも道連れにされることになった。この風変わりな芸術家集団は,百姓たちの怪訝な表情をよそに,サント=ヴィクトワールの魁偉な山塊が現れると,感に堪えたように「おお,セザンヌ」と口走った,とバルチュスは懐古している(『回想録』)。

そして、少年は、堆く積まれた書籍や画集の黴臭いにおいを嗅ぎ、ジッドやボナールをまじえた大人たちの熱のこもった芸術談義を耳にしながら、また父が熱っぽく語るピエロ・デッラ・フランチェスカやセザンヌの話を通して絵に開眼していく。

バルチュスは『回想録』にこう記している。「子 供の頃から進むべき道は決まっていたように思う。 両親は芸術家的な交流を通して、画家たちを家に 招き入れ、また私が絵の道に進めるよう協力して くれた(前掲書)。」バルチュスは天職を見定める にあたって迷いがなかったことを、「両親が創造 の世界に住んでいたのだから、どうしてその流れ に便乗しないことがあろう(前掲書)」と淀みな く書いている。

バルチュスには「画家は口をつぐむべきだ」「画

家はただ絵を描くだけだ」という主義があって、 身辺をみだりに語ることを好まない。だから、バルチュスの生涯は謎に包まれているが、90歳を すぎた頃、「古い思い出が一番近い」と家族との 団欒を回想しはじめた。『回想録』によれば、ま さに絵に描いたような幸福な幼年期だったらしい。 しかし、浮かれたような家庭生活は長くは続かな かった。

<流浪の思春期>

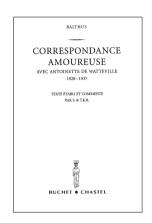
まず、1914年には第一次大戦が勃発、クロソウスキー家はパリからベルリンに移住を余儀なくされる。当時バルチュスは6歳、兄ピエールは9歳だった。ベルリンに移住した当初、クロソウスキー家にはまだ2人の子供にフランス人女性の家庭教師をつけるだけの余力もあったが、たてつづけにまがごとがクロソウスキー家を襲う。

同年父エリックはシベリヤ鉄道の株に全財産をつぎ込んで破産、一家は離散した。『回想録』にはこんな記述もある。代々枢機卿を輩出する、クロソウスキー家と姻戚関係にあるポーランドの名門ルボンスキー家が、バルチュスと兄ピエールに、カトリックになることを条件に(エリックはプロテスタントだった)教育費として莫大な額面を残してくれたのだが、相続の年齢に達したときふたりがドイツにいたこともあり、現実には貨幣価値が暴落して一文の価値もなくなっていたという。さらに1919年には両親が離婚する危機が訪れた。

バルチュスと兄ピエールは「(戦争という) 歴 史の偶然ばかりではなく、両親の離婚のせいで青 春期を流浪のうちに」過ごさざるを得なかった。兄弟は喧嘩をしながら、パリ、ベルリン、ベルン、ビーテンブルグ、ジュネーヴを転々とさすらうことになる。バルチュスの人生は、このように愛情面でも経済面でも「もっとも大きな欠乏の中で始まった」のだ。

だが、リルケが指摘するように、実はそのおかけで、バルチュスは、戦争にともなう死の予感や精神性の退化・腐食に足をすくわれることなく、国境を越えて「開かれたもの」へ立ち向かうチャンスに巡り会えたのかもしれない。

北川 正 3



さて、最初の妻アントワネット・ド・ワットヴィルとバルチュスの間にできた息子(T・K・R)が、1994年モルヴァンのシャッシーの城で、東ねられた手紙を暖炉にくべようとして、両親の『恋愛書簡(1928 - 1937)』を偶然見つけた。その書簡集は2001年にビュシェ・シャステル社から上梓されたが、付された序文で、彼はバルチュスの処女版画集『ミツ』をこんな風に紹介している。「ジュネーヴでは、クロソウスキー夫妻は、1918年に出会ったアンセルメというオーケストラの団長にもてなしを受ける客分だった。このジュネーヴ郊外にある家が『ミツ』(40枚の版画集)の舞台装置だった。」

長いイントロになったが、本論のテーマは、『ドゥイノ悲歌』の詩人リルケが、どのようにしてバルチュスの母バラディーヌと昵懇になったのか、またリルケが 12 歳の少年バルチュスの処女版画集『ミツ』に、なぜわざわざフランス語で序文を書き、チューリッヒから出版する労をとったのか、そのわけを明らかにすることである。

<リルケとの出会い>

ライナー・マリア・リルケは、1910年晩秋から半年あまり、パリで知り合ったタクシス公爵夫人の招きでアドリヤ海に面したドゥイノの城に滞在している。しかし、当時彼は底知れぬスランプに陥っていた。『マルテの手記』(1910)を出版した後、「自分の生活の唯一の支えであった仕事からまったく見放されてしまったという絶望感に

捉えられ、一種の虚脱状態」(リルケ全集4弥生書房 富士川英郎)に陥っていた。ドゥイノの隔絶された堅牢な城に籠もることを決意したのも、どうにかしてこの無力感から這い出るチャンスを掴みたかったからだろう。だが虚脱状態は思いのほか長く続いた。

1911年12月8日付けの、恋人ルー・サロメ宛の手紙にも、長いスランプから抜け出られない歯がゆさが悶々と記されている。「私がここに2、3か月匿ってもらえることは、少なくとも私のいろいろな実際の事態の混乱に対して、よい結果をもたらすでしょう。それから先のことは分かりませんし、また知りたいとも思いません(前掲書)。」

ところが、それから1ヶ月たったある日、アドリヤ海に突き出た突堤に出たとたん、まさに天使が降臨したかのように、「第一の悲歌」の「誰がたとえ私を呼んだとて 天使たちの序列のうちから/それを聴いてくれよう」というあの第一ストローフが口をついてでてきたのだ。

しかし、第一次大戦終結後、リルケの詩嚢は再び枯れ果てる。石胎と化した詩人は、のたうち回りながら、あの「ドゥイノの奇跡」を祈る。しかし、アドリヤ海を見下ろしさえすれば、あの自在な創造力が蘇ってくるものでもない。

詩の受胎が場所しだいではないことぐらいは百 も承知だが、戦後ドイツの精神的荒廃は見るに耐 えず、聴くに耐えず、詩人の絶望感に追い打ちを かけた。リルケはとにかくドイツを離れたかった。 とりあえず、講演旅行をしながらスイスの町々を 転々とし、様々な人々のあたたかいもてなしを受 けた。

1919年10月、こうした旅の途上で、リルケは、当時ジュネーヴに滞在していたバルチュスの母バラディーヌと2人の息子に邂逅する。リルケは、パリのマルゼルブ通りのバラディーヌのサロンに詩人ピエール・ジャン=ジューヴらとともに顔を出したことがあり、バラディーヌとは旧知の間柄だったのだ。ドイツ系の好奇心の強い美女バラディーヌはすでに離婚していた。

一体、バラディーヌが魅了され、バルチュスが 慕ったリルケとはどんな人物だったのだろうか。 1925年当時、パリでリルケに会ったジャン・カスー(美術史家、1897 – 1986)のスケッチを取り上げみよう。「リルケの存在感、洗練された礼節、とても注意深い鳥のような顔、黙っていても、お喋りしていても、様になっていて、彼は周囲を圧倒した。おそらく、外国人だからという感情や密やかで説明しがたい感情を抱きながらも、死の直前にパリが差し出してくれたこの栄光に、リルケは浸っていた(『バルチュス 恋愛書簡集』)。」

さて、リルケがバルチュスの版画集『ミツ』の 存在に気づくのは、翌1920年の秋ジュネーヴで バラディーヌと再会したときのことである。リル ケは生涯最後の恋人の子供たちに親身に接した。 転校を重ねるバルチュスに楽しい学校生活がおく れるよう、校長と談判したこともある。中国を舞 台に物語を書くバルチュスには、山水画の画集を プレゼントしたこともある。バルチュスは、この 画集によって宋代の中国絵画と初期シエナ派の絵 画が共振することを発見、時代や民族を越えた普 遍的な美の境地を知ることになる。「ラルシャン」 (1939) や「シャッシーの農場」(1954) や「樹 木のある大きな風景」(1955) や「モンテカルベッ 口の風景 | (1979) のような風景画に見られる突 き抜けるような独特の宇宙観は、リルケがプレゼ ントしてくれた山水画集をはじめて目にしたとき のインパクトに由来するのだという。父がいない 寂しさも手伝っただろう(離婚後エリックは、長 い長いパリ彷徨の後、最終的には南仏トゥーロン に隠棲した。トゥーロンには亡命中の「ドーム(モ ンパルナッスのカフェ)のドイツ人」が大勢いた ので、「モンパルナッス=シュール=メール(海 辺のモンパルナッス)」と呼ばれていたという), リルケの言葉や雰囲気が知らぬまに少年を包み込 んでいった。

だが、リルケは素白の悲しみからどうしても脱しきれない。彷徨は続いた。リルケは、1921年5月まで、チューリッヒ近くのベルク・アン・ヤーシェルの城に身を寄せる。しかし、やはり、あのドゥイノの詩的充溢が取り戻せない。気弱になった詩人には、ベルクの城、厳寒、孤独、不動、そうしたマゾヒスティックな条件が「ドゥイノの奇跡」を引き起す通過儀礼にさえみえた。リルケは

行者のようにベルクの館にとじこもり,作家人生 の最高峰となる『オルフェのソネット』の錬金に 精を出した。

その頃、リルケはバラディーヌに、パスカルが『パンセ』に記したような神秘主義的な決意を伝えている。「すべての力の蘇り、精神的方向性の変化、こうしたことは多くの危機がなければ起こり得ません。ほとんどの芸術家は、その危機を気晴らしをして回避しますが、そのためにまた彼らは、自分たちの出発点である創造の核に、飛翔の瞬間に触れられないのです。仕事を始めるときはいつも初心に戻り、天使がわれわれを見つけてくれるナイーヴな場所に戻らねばなりません。そのとき初めて天使は約束を果たしてくれるでしょう。」

しかし、詩人の決意とは裏腹に、思ったように 詩の女神は現れなかった。「6年間さんざんな思 いをした後、ベルクで手に入れた諸条件も内面的 な仕事をするには役立ちません。運が尽きたので しょう、そうした条件ももぎ取られてしまいまし た・・・12月12日, フランス語であの序文を 楽しく書いた直後のことです、僕の内面的な集中 力が開花するきっかけとなった、あの仕事の最初 の韻文詩を書くことに成功したのです。しかし、 腹立たしいことに、12月4日は誕生日カードを 書くことで中断されました。12月6日にも,ジュ ネーヴから急の知らせが届きました。そんなこん なで、12月2日以来、まったく進んでいません。 あの流産で, 充実した人生も台無しです。僕の心 は、流れの中心から、周縁へと放り出されてしま いました。そこで、心が君にぐっと近づいたので す。」リルケは一喜一憂するばかりで、余白に思 い出したようにバラディーヌへのラヴ・コールが 記されている。少なくともこの手紙を読む限り, バラディーヌはリルケという大きな息子の愚痴を 聞く母親であり、避難所でしかなかった。

しかし、離婚直後、年頃の息子2人を抱えたバラディーヌもリルケ以上に暗澹とした心境だっただろう。2人が傷を舐めあうように関係をもったのも、先の見えない不安や疲れ切った心境と無縁ではなかった筈だ。先の文面にも滲み出ているように、リルケは何よりも打ちひしがれた精神の支

北川 正 5

えを必要としていた(バルチュスの兄クロソウスキーはバラディーヌとリルケの子供だという説があるが、時期的に無理がある)。ただ、ヴィルジニー・モニエが「彼らの文通は、詩人が亡くなる1926年まで続くが、それは2人に愛情の絆があったことを物語っている。リルケは、クロソウスキー家の2人の息子に経済支援をすることもなければ、忠告を与えることもなかったが、こうした書簡はリルケが2人の息子に関心を寄せていた証でもある(『バルチュス恋愛書簡集』)」と指摘したように、リルケ最後の恋にはバルチュスというおまけが付いていた。

リルケは、1922年4月19日付けのアンドレ・ ジッド宛の手紙でも, 華やかなりし頃のエリック・ クロソウスキーを喚起し、困窮するクロソウス キー家の2人の息子にご助力をお願いしたいとで も言いたげである。「あなたに彼(エリック)を 紹介しても無駄ですが、確かな趣味を持つ、甘美 な芸術家気質の画家なのです。パリが荒れ果てる まで、彼はパリに住んでいたのですよ、といえば 思い出されるかもしれませんね。小生の大好きな クロソウスキー家の息子2人は、とても才能に恵 まれています。パリに生まれ育ったということも ありますが、父親がやっきになって子供たちにラ テン語教育をほどこしたのです。最後の最後まで 彼らはジュネーヴで授業を受けていたのですが、 しばらく前から換金できなくなり、ベルリンに移 住せざるを得なくなったのです。でも彼らは、べ ルリンにはまったくなじめませんでした。ポーラ ンドの古い家柄のエリック・クロソウスキーは若 い頃からパリに執着しており、ここで芸術的信念 と芸術へのあこがれを深めていきました。世界の 崩壊がなかったら一生住み続けたであろうこの場 所を、息子たちにも分かち与えてやりたかったの でしょう(『アンドレ・ジッド,書簡集』)。」

36歳年下の少年バルチュスへの入れ込みようはちょっと尋常ではない。それは、母親バラディーヌを奪った罪滅ぼしというより、『ドゥイノ悲歌』の詩人が、バルチュスとバルチュスの作品に対し深く共感・共振していたからだとしか考えられない。



<『ミツ』>

バルチュスの処女版画集『ミツ』の不思議な魅 力にとり憑かれたリルケは、それを出版しようと 奔走した。リルケは、1920年12月13日に、シャ ルル・ヴィルドラック宛にこんな手紙を書いてい る。「私の小さな友人(12歳)が、この度チュー リッヒのある出版社から素敵なデッサン集を出す ことになったのですが、 小生がその序文を書くこ とになりました。つたない序文です。小生は序文 を書くことを誇らしく思っています。というのも、 序文をフランス語で書くなんて初めてだからです。 バルチュス少年(ポーランド出身) は画家エリッ ク・クロソウスキー氏の息子さんです。エリック は一頃サン=ジェルマンに住んでおられました。 懐かしいでしょう。若干12歳にして、40枚の 版画で、猫との出会いと別れを、頭の中に残って いる残像を拾いながら物語ってくれるのですが、 実に魅力的な作品です。この子には天才がありま す。だから、ささやかですが、出版して世間の目 に触れさせてやろうという気になったのです。バ ルチュスはデッサンしか描いておらず、文章は一 切書いていません。ですから、小生が数ページの 序文をつければよろしいかと思います(『リルケ の手紙』)。」

「子供向けというわけではないこともお断りしておきます。こうしたクロッキーから飛び出してくる言語は、大人の関心も引きつけるでしょう。セーヌ通りの絵画サロンがバルチュスと小生のために親切な好事家を見つけてくれることを祈って

います(前掲書.)。|

「ところで、親愛なるヴィルドラックさん、私の散文はあなたにゆだねます。気持ちよく書きましたが、必要なら徹頭徹尾書きあらため、教えてくれる強力な助っ人が必要です。このむなしい仕事をお引きうけいただけないでしょうか・・・小生は、職人的すぎますから、あなた方フランス人の言葉をみだりに使えないのです。それに、触れてはならない問題に触れているかもしれません。だって、小生には、フランス語のもっとも密やかな敏感なところが分かっていないのですから。小生の企画には必ず罵詈雑言つきまとうでしょうが、どうぞ小生を救って下さい(前掲書.)。」

恋人の息子だからといって、酔狂に出版社を見つけてやったり、フランス語の序文を添えてやったり、出版者とかけあったりするだろうか。詩的充溢を喪失した詩人が、無聊を慰めるために『ミツ』の序文を引き受けたのではないし、引き受けざるを得ない弱みがあったわけでもない。

むしろ、マルク・ド・ローネーが指摘するよう に、フランス語で書く序文ははじめてであり、「ま だ希望と飛翔と喜びに満ちている(『若き画家へ の手紙』)」ようにさえみえる。

リルケは、『ミツ』に自分の内的状況と共振する何かを発見し、その序文をかりて「喪失」と「創造」の本質的な関係を再確認しようとした、というのが妥当な解釈ではあるまいか。因みに、ミツとは、少年バルチュスが飼っていたアンゴラ猫である。

バルチュスによれば、プッサンと同じく敬愛するギュスターヴ・クールべが俗悪なレアリスムに堕すことなく天才を恣にできたのは、雪を描けば「雪のにおいがし、雪という素材が感じ取れ」、裸婦を描かせれば毛細血管が浮き出たようなピンク色の輝ける肌艶を描き出し、たえず存在の核にまで降り立っていく、この画家の対象との「同一化」能力に由来するという(『回想録』)。一方、バルチュスが自己同一化する対象は、主に現実と幻想、あるいは原始と馴致の間を往還する不思議な動物=猫や少女であり、画家バルチュスは彼らの目線で日常の神秘にトラヴァースしようとする。

初代ミツ以来,フライトナーをはじめ,バルチュ

スの周囲にはつねに多数の猫がうろついていた。 モルバンのシャッシーの城では、姪のフレデリッ ク(ピエール・クロソウスキーの娘)と一緒に30 匹以上の猫を集めて暮らしていたこともある。「私 は、彼らのように服従が嫌いで、彼らと同じよう に自学自習で、変哲のない場所は好きじゃない。 猫たちは、私のように残虐だが、俗っぽくはな い」とバルチュスは猫談義になるととたんに饒舌 になる。しかし、バルチュスと猫の性格が似通っ ているのは、鈍重な人間を見下すような嘲笑的性 格だけではないのだ。バルチュスは、「見てごら ん」と自分の瞳の奥をのぞかせる。「毛細血管が 13 のようになっているでしょう、13 はくっつけ るとBになるよね、Bはバルチュスのイニシャ ルなんだよ。私が〈猫の王〉と呼ばれるのもそれ なりに理由があるんだよ」といったオカルト的な ことさえ真顔で語るのである。猫との自己同一化 や神秘的な関係性は当然作品にも及ぶ。

バルチュスが猫マニアになったのは、父母が離婚し、スイス各地を転々とする、寂しく落ち着かない不安定な生活の中で、猫が唯一のよりどころだったからだろう。

しかし、バルチュスの場合は、猫=ペットへの 愛着とは別の観点から猫を眺め直さなければなら ない。シャッシーの城もロシニエールのグラン・ シャレも「猫屋敷」で、気ままに猫がうろついて いる。そして、バルチュスの作品には多くの猫が 登場する。バルチュスが描く猫には、まだ「世界 内に位置づけられていない」少女たち同様、他界 (ailleurs) から現れ、現実と幻想の狭間を、ある いは原始と馴致との境界領域を気ままに往還して, 常人には見えないものを見つめている風情がある。 事実, あの有名な「部屋」に登場する猫の視線の 先には、キャンバスに大穴を穿つほどの目眩が待 ち受けている。バルチュスは、猫の視線を、世界 を「貫通する (traverser)」原始的にして神秘的 な視線だと捉え, それと画家の視線を同定するの である。すべからく「大人の視線」はバルチュス の関心をそそらないのだ。

<喪失と再生>

「ミツはとても反抗的で、機会を見つけては逃

北川 正 7



亡した。しかし、最後の逃亡は決定的だった。再会することは二度となかった(『回想録』)。」突如慰め手を失った少年は、ミツの記憶を拾い、泣きながらその残像を墨汁を使って描きとめようとした。「公衆ベンチに捨てられているミツ、拾ってきたミツ、旅行するミツ、電車に乗るミツ、拾って繋がれ木立の中を飛び跳ねるミツ、作者のベットでロンロンと甘えるミツ、父親の画架の前でポーズをとるミツ、イルミネーションをともしたクリスマス・ツリーに見惚れるミツ。」バルチュスの言葉を借りれば、「私の絵は消え去った世界をある方法で物語っているのだ(『回想録』)。」

ところで、所有物を失ったからといって、必ず 喪失感が生じるわけではない。「喪失感」とは、 むしろ欠落から生じる空虚を意識するあまり、そ の空虚を埋めきれないのではないかという恐怖感 なのである。

『パリの憂愁』の一編「芸術家の告白」で,ボー





ドレールが「美の探求とは、芸術家が敗れ去る前に恐怖の叫びを漏らす決闘なのだ」と述べた意味は、自らの複雑な感情の客観的対応物を探しあぐねる恐怖感だが、それは失踪したミツという愛情の対応物を探しあぐねるバルチュス少年の恐怖感とも繋がっている。

しかし逆に、その喪失という苦い経験を通して、また不在を現前させようとして藻掻き苦しみながら、人ははじめて真に対象と向き合い、ものを見る術をさぐりあてることができる。リルケも『ミツ』の序文で、「ミツに会えなくなると、ミツの姿がいっそうよく見え始めるでしょう(『ミツ』の序文)」と12歳の少年には少々難解な逆説を説いている。だから、まさに「ミツを失ったことは、ある種の方法で画家になり始めることだった(『回想録』)」のだ。

リルケによれば、そもそも人が相手であれ猫が相手であれ、「関係性」など「危うい仮説以外の何ものでもない(『ミツ』序文)。」では、一体、出会いから失踪までのミツとの共生は何を意味するのか? 愛なのか? いや、そこから人間側の一方的な愛情を差し引くと、ひょっとしたら「所有」関係だけしか残らないかもしれない。確かなことは、「喪失は所有の終り(『ミツ』の序文)」だということだ。所有関係は終わったが、「ミツは君の中に生き残っている(前掲書)」と、リルケは奇妙な励まし方をしている。

事実, ミツが消息を絶ち, 姿を消しても, バルチュスにとってミツは現実でありつづけた。なぜなら, バルチュスはその現実を信じているからだ。

「こうしたことはすべて、現実と幻想の混同を引き起こすことになるが、また私のすべての幻想が私の存在を作り出してもいるのだ。結局現実とは何か?現実とは毎分毎分作り出されるものだと思う(『回想録』)。」このからくりこそ、バルチュスが画家になろうと決意した理由だろう。それは「12歳の頃からまったく変っていない(『回想録』)」そうだ。

また「喪失」を拡大解釈すれば、当時バルチュスは13歳になっていた。リルケは、脱皮期に入りかけたバルチュス少年の喪失感をしずかに合わせ見ていたかもしれないし、戦争と両親の離婚で故郷を喪失した少年を、歴史のいたずらでポーランドの所領地を追われた貴族の血脈を合わせ見ていたとも考えられる。

亡命、故郷喪失、愛する猫の失踪、思春期=幼少年期との訣別。「喪失」をめぐる感傷的なイメージは多様だが、絶対的な喪失は「死」である。『マルテの手記』には、全編を通してこの「死」の予感が張りつめている。「人々は生きるためにこの都会に集まってくるらしい。しかし、僕はむしろ、ここではみんな死んでいくとしか思えないのだ。僕は今外を歩いてきた。僕の目についたのは不思議に病院ばかりだった」と陰鬱なパリの生態を見つめるリルケは、人生のはかなさ、危うさを知悉していた。

そんなリルケがバルチュスの『ミツ』の序文を 引き受けた背景には、関係性の喪失や愛情の風化 にともなう悲しみ、逃げ去るものへの悲嘆といっ た生の負の局面を、創造を通して乗り越えようと する「若い画家」への深い共感があったことは否 めないだろう。

最後に、すでに『ドゥイノ悲歌』の第一の悲歌で、リルケが「あのほとんど神のような若者が突然永久に立ち去ったとき、後に残されて愕然とした空間の中で、はじめて空虚が振動と化し、それがいま私たちを魅し慰め助けている」と、詩的創造のディナミスムが喪失と再生のドラマから生まれ出ると歌っていることを記しておこう。

Memoires de Balthus Alain Vircondelet rocher 2001 Balthus Correspondances Amoureuses Buchet .Chastel 2001

Piero della Francesca Roberto Longhi Hazan 1989 Piero della Francesca Lionello Venturi Skira 1990 L'art du paysage de l'atelier au plein air J.Bailly-Herzberg Flamarion 2000

Poussin and French Dynastic Ideology J.Bernstock Balthus Cristina Carrillo de Albornoz Assouline 2000 Balthus ou son ombre François Rouan Galilée 2001 Balthus Stanislas Klossowski de Rola Thames and Hudson 1997

Rilke-Balthus Lettres à un jeune peintre suivi de Mitsou

Marc de Launay Bibliothèque de Rivages 2001 バルチュス 阿部良雄 白水社 バルチュス 芸術新潮 2001/6 バルチュスとジャコメッティー (メルシャン美術館) 1997 シュールレアリスムの展開 思潮社 1990 シュールレアリスムの資料 思潮社 1990 クールベ 近藤明 岩崎美術社 1973 ヴァザーリ ルネッサンス画人伝 白水社 西洋美術事典 リンダ・マーリ 美術出版社 聖母の都市シエナ 石鍋真澄 吉川弘文館 文学と悪 北川正 学文社 1989 西洋絵画作品名辞典 黒江光彦 三省堂 西洋絵画の主題物語 神話編 諸川春樹 美術出版社 ボードレールとリルケ ド・シュガール 審美叢書5 リルケ 芸術と人生 富士川英郎 白水社 リルケ全集3,4 弥生書房 バルチュスの風景について 北川正 東京家政学院大学紀要 42 号

参考文献

Balthus Jean Lemarie Skira 1990